

仏教企画通信

68号

発行日 |
令和4年6月1日

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

私の仏縁

私の仏縁は祖父母と父母のおかげです。明治生まれの祖父は毎朝着物を着て神棚、お地蔵さん、仏塔を拜んでいました。祖母は法華経の朝夕の読経を欠かしませんでした。祖母が亡くなったのは八歳の

ぶより哲学を学びなさい。一生役に立つ。」とそれだけでした。子どもの頃から政治、法律、倫理、宗教、哲学の関心を知りたいと思っていました。手がかりを得ないまま大学を卒業しました。空海を学ぼうとしましたがチンプンカンプンなままでした。年齢を重ねるにつれ父の助言にあり

身近な仏教がひらく 他己社会

NPO法人
ものづくり生命文明機構
常任幹事 岸本吉生

がたさを感じています。哲学を学びたいという思いがあったから、救済、回向とともに今を生きる智慧が仏教にあると考える自分が生まれたと実感します。

真言宗との出会い

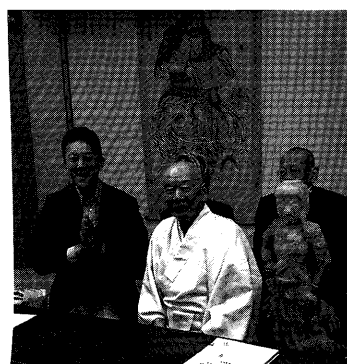
四十三歳のとき、堀江ひとみさんに出会いました。十九歳のお嬢さんを暴力団員に射殺された女性でした。当時、私は警察庁の暴力団対策課に勤務しており、被害者の保護

と救済を担当していました。ひとみさんは茅ヶ崎の長福寺のお生まれで高野山高校の卒業生でした。はじめてお会いした日「あなたは、ご縁でこの仕事を与えられたのです。高野山に参詣して般若心経を暗唱してください」と諭され、密教学を高野山大学院の通信課程で学ぶようになりました。

最初のお題は今でも覚えています。「般若心経の一般的な理解と空海による理解の違いについて一二〇〇字で述べなさい」というものでした。真言密教が仏教の積み重ねの上に成り立っていることは分かりましたが、独学で通信教を学ぶことは難しいことでした。正木晃先生の『空論』(春秋社、二〇一九年)を読んではじめて通信教のことが分かりはじめた気がします。

独学を始めた頃、森勇介大坂大学教授から「三田の独鈷山鑛射寺に参詣して、山主の中村公隆大阿闍梨のお話を一緒に聞きましょう」と誘っていただきました。爾来十八年、毎年参詣して法話を聞かせていただいております。はじめ

中村公隆大阿闍梨



中村公隆大阿闍梨と

て参詣した帰りがけ、私たちが見えなくなるまで見送ってくださるお姿のありがたさに自ずと涙が溢れたことを忘れることができません。その日教わった言葉は「慈悲」でした。宇宙、自然、生きとし生けるものとの共感が密教の基礎にあることを知りました。大阿闍梨にはこれまで多くの事を教わりました。

- 空海が宇宙科学や量子力学の知見をわかつていて書き記していること
- いのちの寿命は等しく一三八億年、宇宙の波動に自分を整えれば誰でも良い仕事ができること
- 身体と口と意識(身口意)を一致させれば宇宙の波動とつながること
- 年月が経って価値が増すものを大切にすること

私の生涯にとって中村山主様からの教えがどれほどの宝になっているか、感謝の言葉が見つかりません。

神社とお寺と修験道

仏教が奈良時代に隆盛になってからも、祖先は神様と仏様を共に敬ってきました。明治以来神仏が分離したままになっっていることは残念に思います。

人吉市の青井阿蘇神社は、神仏混淆の姿が今に残る国宝です。役行者が開いた修験道は各地に残り、お寺と神社をつなぐ民衆の営みが継承されています。秩父にある今宮神社は一八〇〇年の歴史があり修験道の聖地でした。塩谷治

子宮司は一念発起して役行者祭りを再興し、神仏混淆に尽力されました。治子宮司のご縁で出羽三山でのイベントを開催したとき、出羽三山神社の宮司と修験本宗荒澤寺の住職が同席されるのは明治以来はじめてと伺い、神仏分離の根深さを感じました。和魂と荒魂の二つの顔を持つ神様には、愛に満ちた側面と情け容赦ない振る舞いがあります。頻繁に災害に見舞われる私たちは、古来、和魂に感謝し荒魂に畏敬の念を持つて神仏を拜んで来たのでしょうか。

霊性に立ち戻る

アメリカ人の科学者Jig Millerさんが書いた『The Spiritual Child (霊性を持つ子ども)』(Picador Paper 2016)という本があります。子どもの霊性と発達との関係についての最新の知見を紹介する貴重な文献です。Miller博士は、「霊性」とは「自然、神、宇宙など人間を超越したものとの関係性」だと捉えてこの本を書き進めています。博士の提起する科学的知見は次のとおりです。

- 人間は、大いなるものとの縁を希求する霊性の遺伝子を持っている。両親が赤ちゃんに喜びを感じるのには赤ちゃんが霊性を備えているからである。
- 言葉を覚え人間関係を形成すると霊性が希薄になるが、子どもの本能は霊性との縁を結び続けたいと感じている。親はそれを手助けしたほうが良い。
- 霊性との縁は繰り返し結ばれるべきで、成人する前後は特に重要である。
- 霊性との縁を遮断すると抑うつ、非行、暴力といった心の問題が生まれ本人も家族もそれに苦勞する。



2020年8月 北海道十勝更別町にて小谷広一様(中央)と。150ヘクタールの農地を家族で切り盛りする。

別の概念です。「宗教(Religion)」という語はキリスト教を取り入れた明治時代の外来語(Religion)です。日本の民衆は、米づくりや冠婚葬祭など霊性を重んじる生活をしてきました。そうしたことを、宗教の教義とは別の次元の霊性として実践してきました。Miller博士のような科学的知見が研究されていることはありがたいことですし、日本でもその知見が普及することを期待しています。

ゼロからイチを生む子どもたち

コンピュータを使う社会は十年前に大きく発展しました。政府や大企業と同じ力で個人が発信する世の中になりました。生まれた時点でインターネットが利用可能であった一九九五年以降に生まれた世代

を、Z世代といえます。Z世代はLINEやTikTokのようなソーシャルネットワークサービス(SNS)に親しみ、好きなことややりたいことを仲間と常時接続して楽しんでいます。関心のあることは瞬時に調べて会得しています。社会課題を解決するビジネスプランのコンテストに参加する高校生の作品は質が高く、その感覚や情熱はおとな顔負けです。

日本もそうですが、経済が発展して成熟した国ではお金の動きも仕事も七〇%以上はサービスです。Z世代は、高齢化社会で税金の使い道がますます問われることや地球を守ることをおとな以上に真剣に考えています。お客様が喜んでお金を支払うサービスが、健康、福祉、教育、環境などに広がることは高齢化のピークを迎える二〇四〇年代に向けて私たちの救いになるでしょう。



2019年2月 インド・グジャラート州の農村。浄水器と5G携帯が普及し、農村の暮らしが外部と接続され変貌し始めている

私は、こうした子どもたちの成長を応援する中学校・高校教育のあり方を研究開発しています。顧客の求めるものを整える「マーケティング」を中心に自分の天職を見つける「キャリア・デザイン」の授業を構想しています。顧客が喜んでお金を支払うサービスを提供するには、着想から具体化までの「川上のマーケティング」が欠かせません。顧客を出発点に、提供するサービスを着想し、顧客と共に磨いて提供するまでが川上のマーケティング、提供後つがなく提供し続ける営みが川下のマーケティングです。

愛、倫理、美的感覚を出発点にして学び、助け合い、仕事をします。Z世代は、自分が生まれ育った郷土や愛する人の住む場所、お金を稼ぐためというよりも「世の中の役に立ちたい」と仲間と活躍をするでしょう。

私はいま、「世の中の役に立つ喜び」を根拠づける思想はどのようなものか、その意義を世代を越えて共有できないか、この二つのことを思案しています。釈迦は、輪廻からの解脱を目指しました。龍樹が「空」を唱えてから仏教は変容し、日本では大乗仏教として定着しました。大乗仏教は、生きとし生けるものが皆成仏することを願います(願以此功德普及於一切我等与衆生皆求成佛道)。この思想は、僧侶はもとより在家が、他人を貪らず極楽浄土の建設に共に邁進しようとするものであり、地球の誰にも広く共感される思想だと思っています。僧侶の使命は、宗派の特長を生かしながら一人ひとりに寄り添う法話を説き、衆生の成仏を率先して実践することだと思っています。僧侶が身近になることで、人々は仏教を身近に感じ、助け合い、大乗の船が彼岸に渡る航海をつつがな

関係性と縁起

内山節先生(たけのぶ)の哲学は、民衆が大切にしてきた仏教を重んじています。生活に根ざした実践の尊さです。内山先生の多くの言葉で私が特に共感するのは「仕事と稼ぎ」「関係性」の二つです。

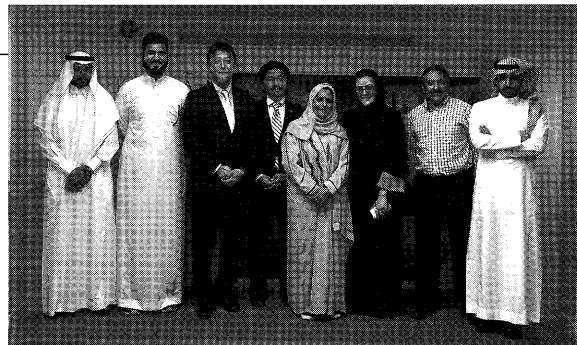
ひとつの職場で週四〇時間働くというライフスタイルは過去のものとなるでしょう。オンラインで仕事ができる今日、何足もの草鞋を履いて生

きていくことが可能になりました。自分が好きなことで世の中の役にたつための仕事をする時間、好きでなくても生計を立てるために稼ぐ時間の双方を組み合わせる世の中に移行していくでしょう。個人と社会が法律で規定されるのが現代社会ですが、法律に触れない人間関係のもつれはたくさんあります。人間関係は心身の健康を脅かす最大の要因の一つですが、法律や医療では解決できません。「苦楽に執着しない」「無私無我を抛りどころにする」という大乗仏教の教えは多くの人の役に立つでしょう。

イタリアの物理学者ロヴェッリ博士は、自然科学の知見として「自然を理解したければ孤立した対象物ではなく相互作用に注目する。宇宙は絶えず相互に作用する網であり対象物は網の結び目だ。」と述べています。不変の存在はない。まさに諸行無常です。数学や物理学の理論体系は観念上のものであり、宇宙や自然界を近似することはできません。事実ではありません。他人がいるから自分がある。子どもがいるから父であり、同僚がいるから同僚なのです。内山哲学は、私たちが縁起によって生かされていることにはつきりと気づかせてくれます。

仏教がひらく他己社会

僧侶と在家は多くの点で仏教との関係性が異なりますが、



2017年4月 サウジアラビアの港町ジェッダ市にて。女性起業家を支援する皆さんと。支援組織を立ち上げたソファナー・ダーランさん(右から3人目)は、サウジアラビア初の女性弁護士で中小企業庁初代副長を務めた方。

その点が過剰に意識されたり無視されていると思います。ものの本を読んで出てくるのは僧侶や教祖であり、その主張を在家の私たちがそのまま活かすことはできません。在家は、先祖回向、現世利益という形で神仏とお付き合いすることがほとんどですが、元旦から大晦日までの日常、誕生から死去までの冠婚葬祭全般に神仏とお付き合いがあります。神様仏様に生かされているという思想や文化がわが国に根ざしてきたからだと思っています。

空海は、鎮護国家を成し遂げることを目指し教育や公共事業に力を入れました。道元は、荒れ狂う武家社会に苦しむ民衆を救うために、僧侶こそ率先垂範して無私になるよう善導されました。時代は異なりますが、お二人とも衆生の成仏を目指されたのだと思います。僧侶には、そのことを哲学し、かつ、実践してきた歴史があります。空海、最澄、法然、親鸞、道元、日蓮

をはじめ数えきれない僧侶が、実践に基づく言葉を残されたのだと思います。事理一致は容易いことではありませんが、便利な生活をしているからこそ、修行や実践の価値が見直されていくでしょう。

宇宙や自然の営みの上に成り立つ私たちは、神仏の縁起によってつつがなく生きられるのです。これからは、「世の中の役に立つ喜び」を基盤に、地球に感謝し、衆生が助け合い、喜びと悲しみを分かち合う時代だと思います。流行し始めている「誰ひとり取り残さない」という理念も同じ文脈だと思っています。他人と自分を比べる社会から、他人と自分、衆生と人類は同じ価値を持つていて考える社会、「他己社会」に移行していくのだと思います。

神様仏様は、そうした営みに大きな役割を果たすと信じます。人々の元氣や使命感の根底にある靈性を神様仏様が確かなものにするからです。

プロフィール

岸本吉生(きしもとよしお)

NPO法人ものづくり生命文明機構常任幹事。物質文明の先にある生命文明の思想、営みを研究している。1962年神戸市生まれ、東京大学法学部、コロンビア大学国際関係大学院卒業。1985年通商産業省入省。中小企業基盤整備機構シニアリサーチヤーとして、離島半島農山漁村を抱える市町村こそ自然、文化、価値創造に社会に貢献し、地元の活力も増すというテーマで全国各地を訪問している。金融ファクシミリ新聞に技術とロ



ーカルの二つの視点から日本の将来を考える「ホモデウスと日本」を連載中。

『参・宝』の 研究文献について

—南英謙宗—

中国の禅門で生み出された『参・宝』という偈頌文献を日本の禅門で大いに顕彰し、また広く敷衍させるために尽力した宗学僧の中から、近世江戸時代に特に傑出した方々として、私はこれまでに卍山道白・天桂伝尊・面山瑞方・指月慧印という四名を紹介してきた。

いずれも錚々たる先徳であり、学僧たちであつたから、それぞれの著述を通じて、またさまざまな立場の講述の席などを介して、若き宗学者や参究者たちに対して大きな感化を及ぼしてきたことはいふまでもないであろう。

われわれ現代の者は、そうした先徳がたの精華を「著述」によって目にふれるわけであるが、考えてみればこれは何とありがたいことか、と今更ながら痛感する昨今である。しかも、昔とは比較にならない照明や眼鏡という「文明の利器」を駆使してまで、だから生涯勉強を続けなければ罰が当るのとは当然であろう。

こんな気持ちでわれわれは古い和書を繙くことが多いのであるが、当面の『参・宝』や五位関係の和書(活字化されていても同じ)の著述類の中には、往々にして「月云」として先徳の語句が引かれたり書き込みされたりしているのを目にすることがある。これは一体何だろうか、どなたのことか、といった疑問も起こさ

ぬまま、若い頃はそのまま見逃していたのが、今にして思えばお恥ずかしき無眼子の日常。

「月」とは、前述した月舟宗胡のことではない。じつは「月」とは「種月」の略称であつて、越後種月寺の英傑であり、わが国における五位思想の最古最高の研究者といつてもよい、南英謙宗その人のことなのである。ただし、曹洞宗の五位思想の著述類約二〇編を集大成している『曹洞宗全書』『注解五』の一冊をみる

と、南英は「月」だけでなく、「種月」「耕雲」「月師」など、さまざまに呼称されている。『洞上雲月録』のように本師の傑堂能勝と合作の著述では、「雲云」と「月云」と使い分けられている。とまれこれでお

かのように、わが国の『参・宝』学研究者や五位の参究者たちは、みなこぞつて南英を研究していたのである。この小欄でもとり上げるのは必然である。そこで、まず南英の略伝をみよう。

南英謙宗(一三八七―一四六



千葉県柏市 龍泉院東堂
椎名宏雄

耕雲寺本堂

『参同契・ 宝鏡三昧』 に学ぶ

6

○は京都(一説には薩摩)の人。自ら謙道人とも称する。八歳で叔父に随つて相国寺の大岳周崇について出家得度。その後は遊方を志し、天竜寺や延暦寺を経て妙光寺三光江雲から易学を学んだ。また永らく臨済宗夢窓派の拠点であつた相国寺を中心に仏教・禅の研究に努め、その後は越前龍沢寺(福井県坂井郡金津町)で梅山間本に参じ、また遠く薩摩福昌寺(鹿児島市)の石屋真梁に参じ、応永二十二年(一四一五)、越後耕雲寺(村上市)の傑堂能勝に参じ、遂にその堂奥を得たという。以後は備州(岡山)の牛頭山に結庵し、永享元年(一四一九)には荒廃していた耕雲寺に遷つて再興を果たし、永享七年には入明し、同年六月に天童山に掛錫。同一年九月、長崎に帰朝した。文安二年(一四四五)、越後の弥彦山麓に種月寺(新潟県西蒲原郡弥彦村)を開山し、また会津の天寧寺(会津若松市)に住して教化に尽くす。長禄二年(一四五九)五月に示寂。世寿七四歳。五位研究にすぐれ、その著述はすくぶる多い。

このように、南英謙宗は南北朝中期から室町時代の間に越後を中心に活躍した碩徳であつたが、その伝記は入明の真偽をはじめ、学問の動静なども判断としないという恨みのある方であり、専門家でもまた今後の解明を期しているといわれる。

これは『参・宝』研究や五位思想についても、前述の江戸宗学の先徳たちの場合とは、基本的に異なっている点といえるであろう。そのみではない、いま五位思想だけに限れば、南英のそれは難解なのである。南英の五位思想書は、前掲の『注解三』にほぼ集められているのだが、『重離晝変訣』『偏正五位図説詰難』各一卷はまだよしとしても、本師の傑堂能勝と共著の体裁をとる『洞上雲月録』と『頭訣耕雲註種月擲擲』の各三巻にいたつては、書名の読みとともに、その構成内容には易の卦が多用されていることに、まずウザリさせられてしまうのだ。私など易に弱い浅学はなおさらであり、のつけから学習意欲がそがれてしまう。それではいけないのであるが、こういった時は、先学者による解説という有難き救いの神にすがるのが一番。すがればかりではダメで、自分も人さまの役に立つような他の仕事をすること、先学も納得してくださるのだ。いまわれわれは、『注解五』という難物ぞろいを、昔それこそ苦心されて解説され解説された松田文雄先生の成果にすがることになろう。

先生によれば、南英による『重離晝変訣』撰述の意趣は次のようである。当時流行していた『偏正五位図説』は、洞門の玄旨でなく易道で詮索した邪説であるから、『宝』の「重離六爻偏正什回互、晝三爻尽五」の真意こそが洞上の密旨である五位なのだ、と述べたのが『重離晝変訣』である、と説明されている。また『洞上雲月録』と『擲擲』を比較検討して、両者はほぼ同じ構成ながら細部では異同があり、後者の方が詳細であるなど、文献史的説明を施されている。こうした文献史的な検討は思想究明に先行するから、このような説明は貴重であり、いたずらに易学や八卦に眩惑されないだけでも有難い。

だいたい、五位思想というと、仏教教学では小乗のアビダルマ教学において、一切の法(存在するもの)を色・心・心所・心不相応・無為の五種に分類して教説を展開するが、禅門の「五位」はそれとはまったく異なる。もっとも、この両者は全く無関係なのか否かは面白いテーマだと思ふが、これまで検討した学説は寡聞にして知らない。

眼目の禅門五位に移ろう。だいたい五位思想というと、宗学者でも宗門人でも重要であるにもかかわらず、マユをしかめてしまう方がいる。て



開山像(南英謙宗)種月寺蔵

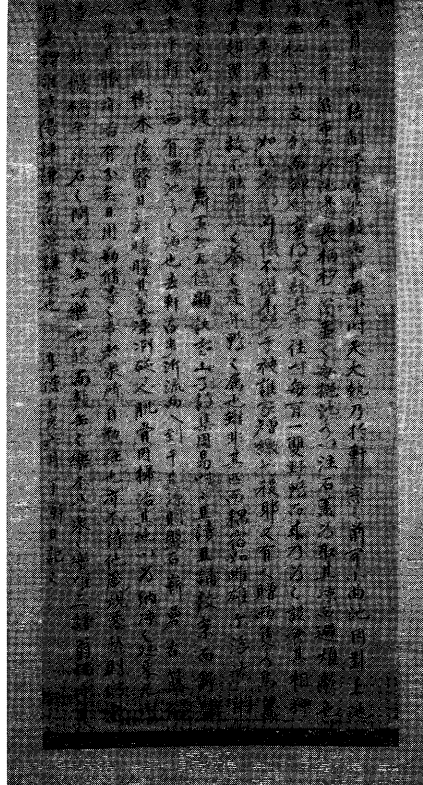


開山頂相(傑堂能勝)耕雲寺蔵

んからむつかしい教えだと決
めこんで、自分にはとても苦
手で難解な教えだとお手上げ
の御仁も少なくないようだ。
はたしてそうなのだろうか。
私はそうは思わない。ただ、
「やさしいよ、小学生にもわ
かるよ」とも言えない。たい
へんむつかしい要素もあるか
らだ。だが、マユをしかめる
御仁にあえて言おう。五位は
むつかしくはないと。平たく
いえば、五位は「偏正五位」
の略称でもあるから、「偏正
五位」を正確に理解していれ
ば、あとはその応用なのだ。
では「偏正五位」とは何か。
いやしくも禅学を学んだ者
ならば常識であるが、いちば
ん基本で重要なのは「正」と
「偏」の意味であろう。つまり
「正」とは真理・平等のことで、
これに対して「偏」は現象・
差別の意味である。この大基
本である「正」と「偏」をさま
ざまに組み合わせたのが「偏
正五位」である。そして、そ
の創唱者は伝統的に洞山良价
さまとされている。「偏正五
位」の構成は、(一)正中偏、(二)
偏中正、(三)正中来、(四)偏中至、
(五)兼中到とされる。私は先著
『洞山』の中で、これらを次

のように説明した。(椎名『洞
山』臨川書店、一九五頁)
(一)は大宇宙の真理は平等で
ありながら、個々の事象のう
ちにそのまま現れている、と
いう平等の中の区別というこ
と。(二)は千変万化している現
実の事象の中に真理はすべて
含まれている、という区別の
中の平等。(三)は、(一)と(二)の中
にあってもなお絶対である、
という平等の絶対性。(四)は現
実の現象はみな絶対である、
という区別の絶対性。(五)は、
右の四つがみな融合調和して
いる、という妙理、と。
なお、右にあげた五項目の
名は曹山本寂の命名であって、
洞山の時は四文字づつだった
という文献もあり、時代が下
るにつれてまた様々な項目名
などが出て来て複雑化する。
「曹洞」というセクト的な名
称が意識されるようになるの
は、時代的には唐末から五代
のころであるが、その名称と
五位思想の唱導とはどうも密
接不離の関係にあったようだ。
そればかりではない。ここに
「機関禅」を宗風のカラーと
する臨済宗の人びとが五位に
加わる。禅門でいう「機関」
とは、修道・修学にいそしむ

雲水・学生たちに深い禅旨を
体得させるため、これを指導
するすぐれたマスター(宗師
家)たちが設けたさまざまな
関門のことをいう。たとえば、
雲門には「三句」「花葉欄」な
ど、臨済は「四賓主」「四喝」
「四照用」など四項目のもの
が多い。ほぼ同時期の洞山さ
まにも「三路」「四句」など、
少ないながらも知られているが、
傾向からいえば臨済系統が圧
倒的に多い。その臨済禅の
錚々たる宗祖たち、たとえば
汾陽善昭・浮山法遠・覺範慧
洪などが五位に関する偈頌な
どを述作していることから、
五代から宋代にかけては、も
はや五位は曹洞禅の家風・綱
要とはいえなくなり、禅門す
べての門風となったといえよ
う。
なお、これら五位の綱要は、
北宋代の末期に成った『人天
眼目』(晦庵智昭編)六巻があり、
五家全体の綱要を知るには便
利な書であるが、わが道元禅
師は『正法眼蔵』仏道の巻で、
これを狂乱愚暗の書として排
斥する。しかし、宋代以後の
禅門ではかえって五位研究は
盛んとなり、宋学や陰陽道な
どの思想的要素も加わって、
大系はむしろ複雑
となつてゆく。
それだけではな
い。概して中国で
は、難洪・難解な
思想体系をさまざ
まな図形を用いて
説明することを好
む。具象的な表現
を好むという民族
的な伝統によるの



「鼓岳軒記」(南英筆)種月寺蔵

であろうか。とまれ、禅思想
も唐代以来さまざまに円相や
図形で表詮されている。これ
がまた五代以後の五位解釈に
も依用されるようになり、五
位研究は一層複雑化を増幅す
る。先述した『重編曹洞五位』
や『洞上古轍』のような重要
な五位の典籍が難解なのは、
こうした時代的経緯から生み
出されたからである。
さて南英の業績に戻れば、
その五位研究書が難解とされ
るのは、右のような流れの中
にあるからである。江戸宗学
の錚々たる五位研究ですら、
傑堂・南英の五位に対しては、
深く研究したものを知らない。
ただ、その研究資料として現
存するものは、前掲の『曹洞
宗全書』「注解五」ばかりでは
ないのである。宗門人として
学者でもあまりよくご存知
ない文献をご紹介しておきた
い。それは、傑堂能勝が開創
し、その本師梅山問本を開山
とする越後村上の耕雲寺(村
上市門前)から開創六百年記念
に刊行された『霊樹山耕雲寺
六百年誌』(平成七年四月刊)一
冊である。宗門でも寺史の類
は多いが、この本はありきた
りの寺史とはまったく異なる。

傑堂・南英両師に関する原資
料を国内各地から蒐集して活
字化した大資料集なのである。
編集した功労者の名は鈴木
鉦三先生という。先生の為
人はおろか、そのお名前も知
る方は稀であるから、少しく
ご紹介しておく。
地元村上市の方で曹洞宗満
福寺(村上市羽黒町)のお檀家
である。もと市の資料館長を
長く勤められた。昭和四〇年
に館長となられて以来約四〇
年、傑堂・南英という不世出
の両偉徳の全著述を郷土の古
拙耕雲寺に常備し後学に資す
ることを念願され、これを艱
難辛苦のち見事に成就され
たのである。この間、氏は目
標達成のために渾身を尽くさ
れ、関係ある宗門寺院は勿論、
宗学者・学者を歴訪し、図書
館・大学等の諸機関を巡歴し、
探索・蒐集・聞取・撮影・勉学
にと、まだ新幹線すらない時
代に、文字通り粉骨碎身の
日々であられた。私は、丁度
『続曹洞宗全書』刊行の仕事
で駒大図書館の一室に居た時
からの知己であったが、氏の
熱意に打たれて、可能な限り
の便宜をおはからいし、また
越後の名徳についての造詣を



「沢善庵」(南英筆)耕雲寺蔵

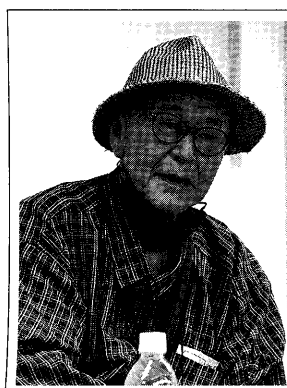
少しは高められたのである。
氏は平成一五年に鬼籍に入ら
れたが、前記の『六百年誌』
をはじめ私的な刊行物類の遺
産は後学者にとつての恩恵そ
のものであり、いま氏のご喜
悦温顔が目にかぶる。
『六百年誌』は、およそ二〇
点あまりの資料が目白押し
のA5版であり、こんな貴重資
料を世に出した新潟人の快挙
である。なおいえば、現代人
では英林寺(五泉市村松)東堂
の関谷正中老師が、雲洞庵
(塩沢市雲洞)に所蔵されてい
た稀観中の稀観資料、南英自
筆『耕雲傑堂和尚之入室』な
る傑堂会下七八名の入室独参
記録を、苦心惨憺して全文活
字化され、これに詳細な訓注
を付した二巻二冊の美本を、
耕雲寺の梅山問本六百回大遠
忌記念として、令和元年六月
に刊行されている。かくして
越後の浄功は連綿として継続
するのを、梅山・傑堂・南英
の三師は文字通り満面呵呵
笑していることを私は疑わな
い。

高橋 繁行 × 内山 節

『土葬の村』に考える、
弔いのかたち日本各地で急速に
消えつつある『土葬の村』

二〇二一年一〇月、急速に消えつつある日本の土葬という葬送儀礼について、三十年に渡る調査を『土葬の村』(講談社現代新書)にまとめたルポライターの高橋繁行さんと、哲学者・内山節さんのトークイベントが開催されました。オンラインと合わせて約三十名ほどが参加し、改めて、弔いとは何か、そして、いまだ終わりの見えないコロナ禍における死の捉え方について分かち合いました。高橋さんから本書で紹介されている各地の弔いについてお話いただいた前半に続き、会場との交流を交えた対談の内容をお伝えします。

内山 僕は東京と、あと群馬の上野村という山の中に家があるんですが、初めて上野村に行った五十年くらい前はまだ土葬が多かったです。地元の人に勧められてやっている僕の畑の少し上で土葬があった時は、「数年したら作物がよくできるぞ」なんて言われたりしていました。でもこの数十年で本当に急速に火葬に変まりましたね。最後に土葬があったのも、もう三十年くらい前のことです。その時亡くなったのはおばあさんで、あまり車に乗ることが好きじゃない人だったんですよ。上野村から火葬場のある市内までは車で一時間半くらいかかるんですが、そのおばあさんは亡くなる直前に、死んだ後にまで車に乗るのは嫌だ、と言ったそうなんです。その時はそれなら、と土葬することができました。でもすでに座棺が見つからず寝棺になり、また村には平坦地も少ないので、穴を掘るのは大変だったそうです。



高橋 繁行
(たかはし しげゆき)
(ルポライターとして葬式、笑いに取材・執筆。高橋葬祭研究所を主宰し、死と弔い関連の著書多数。近刊は『土葬の村』(講談社現代新書)。

高橋 土葬は二〇〇〇年以降、一気に減少しましたが、葬送の儀礼として、野辺送りだけしよう、というところはある。故人を偲んで霊柩車が止まっているところまでみんな歩いていく、といったことを続けているところもあると聞きます。また、火葬された後にお骨を土葬するなど、急にきつちり

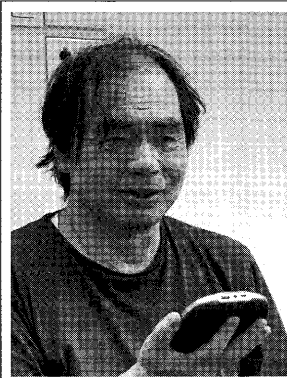
やめたというよりも形を変えているような地域もあるようです。

命は今、
誰のものなのか

内山 土葬が消滅しつつある要因として、人がいないこと、とりわけ都市部で働く人が多くなつて、お葬式のために休みを取ることに難しくなつたことも大きいと思います。昔だった一週間くらい仕事するのを止めて、野辺送りの準備から何からしたわけですが、今、近親者でもないのに一週間会社を休むなんてなかなかできないですからね。

ただ、そうした変化の中でも変わっていないのは、いまだお葬式は遺族ではなく共同体が出すもの、という風習だと思っています。お葬式と同時に、誕生に関わる話でもあるんですが、一九六〇年代の後半までは、子宝を願う夫婦が神社にお参りに行く際、村の共同

体みんなと一緒に祈りに行っていたそうです。そうして無事に子どもが産まれたら、まだ首が座らないうちからみんなで抱っこしたりする。さらにその子が初めて外の世界に出る生後三、四日目に行う儀式もありました。産まれたばかりの赤ちゃんは専用の羽織を着て、お婆さんが抱えながら外に出る。行き先は厠、つまりお手洗いで、厠の神様への挨拶儀礼なんです。それも自分の家ではなくて両隣の厠に行っていました。赤ちゃんの額には、生命力の強さをあやかるために「犬」という字が書かれて、隣家に声を掛けながら敷地に入る。当時はみんな母屋とは別棟だった厠に入り、赤ちゃんに中を見せてからお米を一山置いて帰るというものだったそうです。そうした様々な儀式が各地域にあった、共同体がみんなで得た命を祝い、また死んだときも共同体が弔っていたんですね。この五十年くらいで大体が消えてしまったと思います。では現在、命とは誰のものなのか。現代では、自分の命は自分のもの、と捉えがちですが、個人として産まれて個人として生きて個人として死ぬ、という生命感で苦しんで圧迫されてしまうでしょう。少なくともかつての日本では、共同体とともにある命だったんですね。今の時代、産まれた土地で生きて死ぬ人も少なくなっています。が、この社会のなかでも、どうしたらまた、関係しあう中で産まれ、生き、送られる世



内山 節
(うちやま ふみあき)
哲学者。一九七〇年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』全15巻、農文協『半市場経済 成長だけではない「共創社会」の時代』(角川新書)他多数。

界が作れるのか。高橋さんのお話を聞きながら、そんなことを考えていました。

高橋 かつては、土葬だけでなく野焼きなども地域の人が、点火から燃え尽きるまで全てやっていたんですね。それらが無くなり出したのもまさに一九六〇年代、昭和三十一年以降です。内山先生の著書『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』でもこの頃に起きた社会や生活様式の変化に触れていますよね。野焼きも土葬も、昭和の終わり頃にはすっかり無くなり、日本人の心がガラッと一変したような時期だと思っています。『キツネに騙される気持ち』とは一体なんだったんでしょうか。

これについては、少し個人的なことなんです。幼少期の体験で思い出があるんです。田舎に住んでいて、おじいさんが30羽ほどニワトリを飼っていました。ぼくは小さい頃、そのニワトリ小屋で過ごすのが大好きだったんです。まだ五、六歳の頃、全裸になってニワトリの中に包まれて昼寝をしたり、まるでニワトリたちがお父さんとお母さんのような妄想をしながら過ごす時間は本当に幸せでした。でも不思議なことに、一年くらいするとパタッとニワトリ小屋に行かなくなりました。今思うとあの瞬間、ぼくは人間になったような気がするんです。自然の一部として「幸せなニワトリの子ども」から人間になった。ニワトリ小屋で過ごした時間は、まるで人生における幸せの絶頂みたいな気持ちでしたから、人間になる良し悪しを考えたよりも、人間は自然から切り離された動物という意味では不幸でもあって、あの子ども時代の気持ちの正体を考えることも、ぼくが生きている目的のような気がしています。

内山 自然から離れて人間になる、はまさに近代の、もつと云えば欧米的発想なんですよ。でも最近、欧州の哲学者には「人間は自然から離れることで人間であることを自己否定してしまったんじゃないか」と言い出す人も出てきました。いろんな意味で人間は自然に包まれて生きてきたのに、それを失った時、人間の誕生を意味するのか、もしくは自己否定の始まりなのか、という話です。ただこれはどちらが正しいかというものはなく、どちらの意見に納

得できるか、という文化の問題でもあります。

例えば、共同体の教科書的存在でもある大塚久雄さんの『共同体の基礎理論』では、共同体は封建的で前時代的で、人間が自然から独立できていない状態、といった書き方をされています。もしも大塚さんがご存命だったらおそらく書き直しているでしょうけども、一九七〇年代の日本社会ではその感覚でこそ納得していたんですね。どちらの考えが正しいかどうかではなく、私たちの文化は今、どちらの考え方に馴染むのが問われている。高橋さんの本にあるような、共同体みんなが土葬や野辺送りをしていたのはある時点で面倒くさいことになり、今では葬儀屋さんで電話して全部やってもらえるようになったわけなんです。でもほんの少し前まで残っていた慣習だと聞けば、すぐには無理でも、こっちの方が良いなと思う納得感がありますよね。

ある方向に向かって走っていた時代がもしかしたらまた変わっていくかもしれないし、変わろうとし始めた人ともうでない人に分裂し始めた時とも言える。これは私たちが今、何かしらの文化変容を始めているということだと思います。

死を恐れる、穢れ(けがれ)の気持ち

高橋 本にも書きましたが、死を恐れる気持ちが強かったことが各地の取材で出てきました。死を伝染病のように恐れて、弔問客のための煮炊き

も故人の家の火を使わない、タバコをつけるのすらその家の火は使わない、といった風習が各地にありました。共同体で弔うんだけど、野辺送りでも一番死の穢れに近いところには息子さんや遺族が担うんですね。恐らく、家族だけが死の穢れを被っていたところから、村落が成熟してみんな弔おうという様式に発展したんだと思います。結果的に、社会の構造もそれを支えるようになってきているように思います。現代では、身内でない遺体の引き渡しができないといった手続き上の仕組みに社会との齟齬がある。これからは、友人間でも弔える条件などができると良いなと思います。

内山 その感覚は時代や地域差も大きいでしょうね。日本人だってそもそもみんなものすごい混血児ですし、土葬が長く残ったという京都・奈良・滋賀の辺りは、古代からいろんなものが入り込んでいた土地でもあるし、各地でその時に納得いくものを作り上げていったんです。神道ができる前の死生感があり、後に仏教ができて、それぞれ

の郷土性もあるし、一部では儒教も入ってきたんですよ。元々、死を穢れとして捉えるのは神道系の捉え方でもあります。古事記の中で、イザナミを亡くしたイザナギが黄泉の国に会いに生き、やっとなに姿が腐乱死体だったために目が穢れて見えなくなってしまうた、でも海水で洗った

ら穢れが取れた、と。そこからお葬式の後に塩を配る習慣に繋がるんですけど、仏教とは縁もゆかりもない話ですし、この習慣も最近では葬儀屋さんに断る人も多いと聞きます。

高橋 知ってる人が亡くなって愛惜の念もあるんだけど、恐怖の気持ちがドロドロとした感情をもたらし、多神教的な弔いの風習に反映されていることは、ある意味で非常に人間的というか興味深いところなんです。以前もある住職にお話を聞いた際、教団としては迷信のようなことは避けたいけど、村の住民たちからは恐怖や迷信に近い相談が多いなど、ご住職としては折り合いの付け方に悩んだこともあると話してくれました。

弔いとは何か

内山 僕の家はおじいさんが永平寺で修行して曹洞宗のお坊さんになったんですけど、戒名は生きていたうちに出したそうです。檀家さんたちもだんだん年齢を重ねると、そろそろ戒名をもらっておこうと準備したりする。それがお寺や仏と縁を組み直すための慣例でもあったんですね。ただ中には戒名を受ける前に亡くなってしまう方もいて、そうすると急ぎよ故人の頭上で受戒式をしたりしたそうです。そして戒名代は一切もらわなかった、と。決して田舎でもなく準都会といった地域でしたが、数十年前はそうしたこと

は人々が死を迎えるための準備でもあったわけなんです。僕は土葬だけでなく、そうした関係性まで失ってしまいましたね。

高橋 特にこの十年程、いろんな形で土葬と共に消えたり変わったりするのを見てきました。滋賀県で取材した際に、ご自身のおばあさんとお母さんを土葬で見送ったHさんという男性に大変お世話になりました。昭和九年生まれのHさんは、まだ小さい頃に亡くなったおばあさんが湯灌された時の記憶を細やかに覚えてくれたり、湯かんに使われた実際のたらいを見せてくれたりした方で、そのHさんも数年前に亡くなられたんです。Hさん自身は火葬されたんですが、少し前に奥さんと話したら、まだお骨が手元にあると言ったんですね。聞けば、本当はあの山に眠らせてあげたいけど、埋葬墓地は共同墓地でもあるため、少し前から山を潰す話が出て、と言っていました。土葬というよりも、墓地そのものの存続も危ぶまれるようになってしまい、こうして無くなっていく形もあるんだなあと感じましたね。

内山 結び合う世界で生きて送られたかつての関係を、どうやったら今、取り戻せるか。そういう意味でも、弔いとは、あくまでも亡くなった人のためのものでしょう。まず日本には亡骸信仰がなく、問題は遺体から抜き出た魂が成仏できるかどうかにあります。



すよね。極端な言い方をすれば、魂が出た亡骸はゴミであって、でも大切な人だからぞんざいに扱えるわけもなく、作法に基づいて送ってきたわけなんです。最もいけないとされていることは、自分が死んだことを了解できない魂が発生することでした。そこで、あなたは死んだんですよということを魂に伝え、行くべきところに行っても何も心配ないですよと送り出した。弔辞を読むのはそうした意味があるわけですね。死にはいろんな形があり、震災や事故もありますが、大切なことはあの世に行く魂をちゃんと供養すること。法事なども含めて死者のためにやるものだと思います。それによって残された人々のためになることもあるんだと思うけど、それは結果ですから目的ではないですね。また、魂はあるのか無いのか、といった近代人的発想も、伝

統的な日本の発想とは少し違っています。日本では、関係性があるから魂がある、という順番です。仏もそうですね、仏と縁を結ぼうとするから仏はいるわけで、縁を結ばない人にとっては御本尊もただの彫刻でしかなくなってしまう。まずは関係性が先にあります。最近、実家の墓の有無とは関係なく、自然葬を希望するという人が増えたとも聞きます。それこそ土葬だったから一人一墓だったわけで、ある種の伝統回帰と言えるでしょう。○家の墓というものができたのは、天皇制ができて平民にも家制度が作られた明治以降のことです。それまでも家族は存在したけど家制度に変わって、ただ拝むための先祖代々のお墓は家単位のお墓になってしまった。家制度になつたおかげで女性だけでなくいろんな人が苦労してしまっているわけで、明治以降のこうした変貌も、これからどういう風に検討して修復するかが課題だと思います。ずらっと○家と書かれたお墓が並んでいるのは何だか不気味な気持ちにもなりますから。そういう意味でも、高橋さんの『土葬の村』が発売8ヶ月で7刷も売れているというのは、こういう内容に人々が惹かれる時代になっていることを示唆していますね。

インタビュアープロフィール
柳澤 円(やなぎ まどか)
ライター、編集、翻訳マネージャー。
食と農と社会の課題をテーマにテーマ
に執筆する。株式会社Two Doors代表。

2022年5月刊行

佐々木宏幹 編著

宗教人類学の地平

別冊『写真が語るシャーマニズム』(総頁数63頁)付き

現代の僧侶に求められているものとは？

研究者として、寺院に生まれたものとして

「寺院と僧侶のこれから」を繋ぐために

思索を続けた著者の珠玉の18遍

小松和彦先生の序文より抜粋

序 佐々木宏幹先生の学問

小松和彦

なによりも、佐々木先生が、お元々でもなく、九十年、歳を過ぎられ、しかも今なお世帯を賑わすべく、心から研究と創作に没頭されている姿に、私は、心から敬意を表します。

佐々木先生は、若い頃から、人類学的知識を背景にしたシャーマニズムの研究に取り組み、今ではシャーマニズム研究の第一人者、権威として、宗教研究の分野のみならず、隣接学問の分野においても広くその名が知られています。

『シャーマニズム』(中公文庫)や『シャーマニズムの人類学』(文芸春秋)などの著書に示されているように、佐々木先生の研究は、シャーマニズム研究の分野に留まらず、人類学、民俗学、宗教学、社会学、心理学、文学、芸術学など、幅広い分野にわたって展開されています。

佐々木先生は、シャーマニズムの研究を通じて、人類の文化の多様性を理解し、現代社会の問題を解決するためのヒントを求められています。

佐々木先生は、シャーマニズムの研究を通じて、人類の文化の多様性を理解し、現代社会の問題を解決するためのヒントを求められています。

目次

口説	佐々木宏幹 著	1
序	小松和彦 著	2
第一章 シャーマニズムの人類学	佐々木宏幹 著	3
第二章 シャーマニズムの民俗学	佐々木宏幹 著	10
第三章 シャーマニズムの宗教学	佐々木宏幹 著	17
第四章 シャーマニズムの社会学	佐々木宏幹 著	24
第五章 シャーマニズムの心理学	佐々木宏幹 著	31
第六章 シャーマニズムの文学	佐々木宏幹 著	38
第七章 シャーマニズムの芸術学	佐々木宏幹 著	45
第八章 シャーマニズムの現代社会	佐々木宏幹 著	52
終章 シャーマニズムの未来	佐々木宏幹 著	59

刊行のことばより抜粋

刊行のことば

「シャーマニズム」は、人類学、民俗学、宗教学、社会学、心理学、文学、芸術学など、幅広い分野にわたって展開されています。佐々木先生は、シャーマニズムの研究を通じて、人類の文化の多様性を理解し、現代社会の問題を解決するためのヒントを求められています。

佐々木先生は、シャーマニズムの研究を通じて、人類の文化の多様性を理解し、現代社会の問題を解決するためのヒントを求められています。

佐々木宏幹「編著」



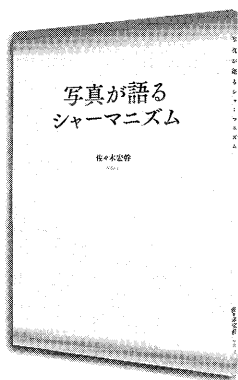
「佐々木先生の明快にして斬新なシャーマニズム研究は、若くは世の研究者の関心を刺激し、その後『シャーマニズムの人類学』の出版によって、シャーマニズム研究の第一人者として、宗教研究の分野のみならず、隣接学問の分野においても広くその名が知られています。

佐々木先生は、シャーマニズムの研究を通じて、人類の文化の多様性を理解し、現代社会の問題を解決するためのヒントを求められています。

仏教企画刊

A5判上製 263頁(別冊:A5冊子) 本体2,300円+税

別冊附録『写真が語るシャーマニズム』には、総数117枚のシャーマニズムに関する写真を掲載。佐藤憲昭駒澤大学名誉教授は、「本書は、単なる写真集ではなく、解説文のほかに、シャーマンのライフヒストリーや活動内容の文章などが数多く見られ、従来には無かった、シャーマニズム研究の写真集として仕上がっている。シャーマニズム研究の第一人者が、日本とアジアの各地で行なってこられたシャーマニズム調査の足跡を知ることのできる本書は、まさに画期的な刊行であるといえよう。(本文より抜粋)」と紹介。



お申し込み

書店にはおいてありませんので、ハガキ・電話・FAX・メールにてご注文ください。

仏教企画

ハガキ 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
電話 042-703-8641
FAX 042-782-5117
Eメール fujiki@water.ocn.ne.jp

佐々木宏幹 『宗教人類学の地平』 を推薦します

駒澤大学 総長 永井政之

著者佐々木宏幹先生が、文化人類学を専門とされ、中でも日本におけるシャーマニズム研究の最先端を歩まれてきたことは誰もが知るところである。宮城県曹洞宗寺院に生を享けられた先生が、母校駒澤大学に奉職され、シャーマニズム研究に没頭されるに至った経緯はご自身で述べられてもおり今は触れない(読売新聞、二〇一一年一月一四日)。

いづれにしても先生が、宗教にとつて教祖をはじめとする関係者の「カリスマ性」や「力」は欠くことのできない要素と考えられておられることは疑いない。

本書は、そのような先生が『仏教企画通信』誌上において、折に触れ執筆された論考一八篇をまとめたものである。ご専門を踏まえつつも、宗教、就中、仏教が抱える現代的課題に視点をすえて論じられた内容は、提言あり、箴言あり、苦言あり、そして憂宗の想いありと、極めて含蓄と示唆に富んだものとなっている。それは先生が知的営為としてはもちろんながら、常に現場を意識されつつ自らの学問を構築されてきたことの証でもある。

分かりやすさと、濃密さが

あいまつての記述は、面識の有無にかかわらず、読者をして佐々木先生の誠実な人柄を彷彿とさせ、その聲に接する思いを抱かせることは疑いない。

何よりも本書から、佐々木先生が何を指して研究を続けられ、何を言わんとされているかを味読した上で、どう己の身を処していくか。それが現在、そして将来にわたり現場を預かる私たち僧侶に課せられた「公案」と言えるよう。

本書では、そのような佐々木先生の御論考を柱とし、斯学の泰斗たる小松和彦氏、高見寛孝氏、佐藤憲昭氏が、「佐々木人類学」を組上り、佐々木先生に論を展開されている。それは先生の学問の幅広さを知らしめるとともに、将来における「佐々木人類学」の可能性を示すものでもある。

最後に佐々木先生と問題意識を共有され、さまざまな立場からの講読に込められる本書刊行に尽力された藤木隆宣師の御尽力を特筆するとともに、卒寿を優に超えられた先生のさらなる御健勝と御活躍を祈念して推薦の言葉にかえさせていただきます。

編集後記

藤木隆宣

知人の宗教学者正木晃先生に、この度弊社より発刊された『宗教人類学の地平』の感想をお聞きしたら次のようなご返事を頂いた。

「佐々木宏幹先生はまぎれもなく宗教人類学の大学者である。というより、宗教人類学は佐々木先生の登場によって、学術研究の専門分野として、初めて確立されたといっている。」

宗教人類学という、なにやら堅い印象があつて、仏教、とりわけ現場の仏教と縁がなさそうに思われがちだ。しかし、その種の認識は間違っている。他の学者先生はともかく、佐々木先生の宗教人類学は仏教の現場と直につながっているからである。

その背景には、先生が東北地方の曹洞宗寺院に生まれ、しかも幼少時にご両親を相次いでなくされた体験が深くかわっているようだ。生と死、

靈魂、現世と来世、仏の本質などの根本問題を考察するとき、先生は他の宗教人類学者と異なり、日本の伝統仏教から受け継いだ知識、いや智慧を存分に活用して、独自の見解を展開されてきた。

あえていえば、他の宗教人類学者の多くに、地に足がついていないところが見出せる。その理由は、宗教人類学という学問が近代化した欧米から輸入されたという事情に求められるかもしれない。また仏教学という仏教を専門に扱う学問は、教義にばかり関心を寄せてきた。たとえば日本人の宗教観にとって最も重要な意味をもつ靈魂観や来世観を、

「仏教にあらず」と強弁し、無視してきた。それに対し、佐々木先生は「生活仏教」を樹立し、「日本仏教」の特質を見事に喝破された。ゆえに『宗教人類学の地平』は、研究者よりもむしろ僧侶が読むべき傑作となっている。」

序文をお書き戴いた文化功労者の小松和彦先生からも「立派な本になりましたね。」

記念のつどいがありましたらお声をかけてくださいませんか」とのうれしいメールをいただいている。

私はこの本の販売が二千部を超えたら第二弾の発行を企画したい。この度収録できたのは、佐々木先生が連載された五十編の中の一八編に過ぎない。第二弾では二〇編から二五編は収録したいものだ。ご寺院の蔵書として、また各種行事の記念本として是非ご利用をお願いしたい。

平成十一年十二月二十四日に承認された「第三種郵便物」が二〇二一年十二月二十日に取り消された。それまでには当然担当者とのやり取りがあつた。日本郵便株式会社の見解は、承認には発行部数の八〇%の領収書が必要とのことだった。『曹洞禅グラフ』は年四回の季刊なので各号に発行部数の違いがあるが、例えば七万部の発行だと五万六千部の領収書を揃えなくてはならない。担当者に、『曹洞禅グラフ』は全国の曹洞宗寺院が檀信徒宛にお配りするものだから、全国の

院から五万六千部分の領収書を取り寄せることは無理だと伝えたが受け入れられず取り消し処分になった。平成十一年にも同様の説明をして承認されたので、取り消しには今も納得していない。担当者に、ではどうすればいいのかと聞いたら「廃刊ですね」と言つた。この言葉は今でも忘れられない。この件は政治かとも思つた。『曹洞禅グラフ』一六〇号から一通八二円のヤマトDM便を利用している。全国のご寺院からお問い合わせも頂きご迷惑をおかけしていることに深くお詫びしたい。

小誌は昭和五十七年の創刊からお陰様で満四十年になった。今日から五十年に向けてのスタートである。今後もしご支援のほどをお願い申し上げる。

仏教企画発行の刊行物

(※部数により割引があります) すべて税別価格です

『修証義』解説 丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』 文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『葬送のしおり』 長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』 須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著	150円★
随想集 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って	500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著	500円
『宗教人類学の地平』 佐々木宏幹編著	2300円

※『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月30日
1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

観音の咒
大悲心陀羅尼

発行所：仏教企画
定価：本体 500 円＋税

渡辺章悟 著

観音の咒
大悲心陀羅尼

既刊0巻

手 ま り 学 園

寄附者御芳名
R4.1.29～R4.5.1

所在地	寺院名(個人名)	金額
長野県	円福寺	10,000
大分県	松樹英子	10,000
神奈川県	青木義次 (101)	5,000
三重県	永昌寺	5,000
宮城県	玉川寺	10,000
秋田県	実相寺	10,000
神奈川県	藤井まり	5,000
愛知県	花井寺	10,000
福岡県	龍國寺	10,000
岩手県	円城寺	5,000
東京都	石井友子	5,000
三重県	光明寺	10,000
栃木県	満福寺	10,000
栃木県	東陽院	10,000
愛知県	永澤寺	10,000
愛媛県	昌福寺	10,000
静岡県	龍雲寺	5,000
神奈川県	松田 薫	5,000
秋田県	円通寺	8,000
群馬県	仁叟寺	10,000
岩手県	大光寺	10,000
埼玉県	曹源寺	10,000
兵庫県	菩提寺	10,000
神奈川県	正観寺	10,000
茨城県	龍泉院	20,000
宮城県	龍澤寺	10,000
佐賀県	普恩寺	20,000
東京都	天寧寺	20,000
北海道	荒澤道範	10,000
宮城県	瀧澤寺	30,000
宮城県	繁昌院	5,000
三重県	地藏院	10,000
千葉県	宗胤寺	10,000
鳥取県	林泉寺	10,000
神奈川県	青木義次 (102)	5,000
島根県	總光寺	10,000
群馬県	長松寺	20,000
宮城県	耕田寺	10,000
神奈川県	桑山あおい	10,000
東京都	大田美和	30,000
静岡県	大雲院	3,000
熊本県	地藏院	10,000
兵庫県	永澤寺	10,000
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	本覚寺	20,000
岩手県	清水寺	30,000
神奈川県	石川信子	5,000
栃木県	天翁院	10,000
神奈川県	青木義次 (103)	5,000
神奈川県	石川千恵子	20,000
佐賀県	高傳寺	5,000
三重県	最明寺	10,000
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	青木義次 (104)	5,000
合 計		576,000

てまり学園にご支援をいただき
誠にありがとうございます。